KOMI

Edr: KouMUKAI
2-12-2, ASAHIMACHI, ABENO, OSAKA, JAPAN 10
Jul, '80 NO. 240

合同通信 向井孝
大阪市阿倍野区旭町2—12—2

▼二三九号の〝詩〟については、思いもかけず、いろいろな人から感想をもらって、大へんうれしかった。詩誌などに発表するだけでは、とても、こんなよろこび、はげましはかえってこない。

▼そのなかで、とびぬけてありがたく「ぜひみんなにもよんでもらいたい」と思ったのが、飯田博久さん（東京拘置所在監・死刑判決をうけ上告中）の手紙だった。

▼『同行四人・他』の感想の分解と再編を、眼にうかべながら、これを、いま写している。ありがと、飯田さん。

〝同行四人〟補遺

飯田博久

大阪、○×○警察。留置場とかいてあるドアのとなりに、看守仮眠室のネームが書かれた木札が下がっている。

かすかなチャイムの音がするつど、二段式ベッドのふとんが動き、間をおいて鳴っていたチャイムが三度目に鳴りだしたとき、ふとんからのびだしたゴツイ手が、その呼び声をとめた。

「長さん、時間ですよ、長さん」

ふとんをごそごそとかかえこんだ若い刑事がそのふとんをたたみながら、上段に眠っている中年の彼の上司を起こす。

「ウウッウーッ、もう三時になったのか」

と言いながら起き出すとがすかなのびをした。四十、代半分を越した彼には、夜十時から五時間ほどの仮眠では少々つらかった。

十分ほどして、刑事課の自分の机に坐った二人は、カップラーメンとパンを食べだした。そこへまた三〇、代の刑事が二人加わった。

「どや、待機室の具合は」

「いやぁ仮眠室とボチボチでんな」

黒いナイロンジャンバーを背広の上に着たやせぎすの保安係主任と、作業服を着た中さんと呼ばれる男が待機室組で、そろそろ法くなった髪を気にして、眼鏡をメタルフレームの着作りにし、半コートを着た長さんと呼ばれた男と、体のがっしりとした25キになったばかりの嶋ちゃんと呼ばれる、Gパンにセーターの男が、仮眠室組だ。

「長さん、今日は嶋ちゃんと組んで、先行の方頼みます」

「へェじゃあ、主任は中さんと後につくんですナ」

「そう、連中の尾行も大変なモンやしなあ、マ、任務やから、しゃあないナ頑張ってや」

外は、まだ夜明けの気配すら見せず、4人の口から白い呼気が白く赤く、署の常夜灯に映し出された。パトロールに出るパトカーと挨拶をかわし、白いサニーライトバンでスタートする。

「長さん、先行の時の注意いうたら、どんなもんです？」

「ああ嶋ちゃんは〝先行〟は始めてやったな。連中は、尾行されとるちゅうことを承知しとるさかいにな、こっちをまいてまう様なことやりよるやろ。電車にギリギリに乗りこんだり、乗っといてやな、ドアの閉まる寸前に降りたりな、そんなとき後から尾行しとったらおいてけぼりをくわされて尾行は失敗や。そこでやな、〝先行尾行〟っゆう技術を使うわけや。尾行ちゆうたら、後からついてくるもんやと思うやろ。まさか自分の前に尾行者があるとは思わんさかい、そこがつけ目や」

「しかしでっせ、相手がどこへ行くかわからんときには、違った方向へ行ってしまうのやないか、と思うのやけど」

「そこが技術やね。先行だけやったら、えらいけどな、二人でサンドイッチにしたら大丈夫や。先行と違った方へ行かれても、後の方がついてゆくし、その間に先廻りしてみたり、後についてたのが先に出て、位置を変えてみたり、衣類を変えたりしてつけていくのや」

「そのほかにありますか」

「あるデ、相手が二人以上の時にやな、会話を盗み聞いてどこへ何しにいくか、見当つけたりやな、交友関係のデーターがあれば、日頃のパターンからして、どこの駅へ行ったらどこの友達に行くとわかるさかい、先回りするのや。切符買うてるの見たら、どこ行きか窓口別で大体見当がつくさかい、手帳を見せて、相手の行くホームへ先へ行ってしまうとか、するのやね」

「会話きくて、どないして・です？」
「こんな超指向声高感度マイクを向けて・やるのや」
「へエーこれ・マイクやったのかいな。警棒の出来そこないのようなんやね」
「これはな・音波に角度があるゆうことを利用して、マイクに直角の音波だけをひろって・ななめ角度の音波は反射板と吸音材で消してしまうのやねん。普通の会話やったら百メートルぐらいは・バッチリや」
「マイクでとれんような時は？」
「口のうごきを読むのや。」
「ああ、それなら講習うけました」

車が、静かにとまる。窓のガラスを少し下げ・一軒の家にマイクが向けられた。夜が明けるには・まだ間がすこしある。……

「連中、うごき出しましたがね・どないします？」
「長さんと嶋ちゃんは、歩きで先行してや。こっちは車で後尾につくさかい。エエッと時間は、午前10時30分開始」

ゲームが開始された。霜柱が菊の植木鉢の中で溶けだし・黒く土を濡らしている。工場が亜硫酸ガスをはき・チボチボ流れるどぶ川に得体の知れぬ廃液をまぜこみ、町は今・人生を生産しだした。

「長さん・連中、阪急に行くみたいですね。大阪駅やろか」
「まともに、うしろ見たらあかんよ。あの二人の様子と荷物からして、デパートへ行くゆうよりも駅やな。歩道の歩き方見てみ、デパートへやったら、もっと右の方へ寄るはずや。道角に向きをかえたりする歩き方は・ようせんやろ。…入口通り過ぎた・間違いない。駅や、入場券を三枚買うておいて」
「主任、駅に向ってます」
「よし、車ここにとめて、ゆっ」
「中さん・もっと近づこうや。行先きはどこかわからんから、君は連中がどこの切符買うか見とって。類知られてへんから大丈夫や」
「了解」
「どこやった？」
「主任、金沢行きでっせ」
「ほな長さんに知らせて。ホームの番号は5番線やて」

そう云われて・中は先行しているチームに、手信似で五と知らせた。
「長さん5番線でっせ」
「ほな・さきあがっとって・急げ！」

注目の二人は、タイミングをはかりながら歩いていた。電車のドアが閉まるギリギリに乗れば、尾行者は乗ることが出来まいと思い・また、あわてて一緒に乗りこもうとする人間をマークすればいい・と考えていた。

ベルが鳴った。二人は階段を駆けのぼり・電車にどっとかけこんだ

シュンとドアが後を遮断する。黄泉平坂の大厳のごとくに

「長さん・主任なんか乗れませんでしたよ」
「ま、仕方ないやろ・怪みられてないし・安心しとるやろから…。駅の電話で連絡だけとっとこか」
「モシモシ・主任でっか」
「長さんか、いまどこやねん、何、金沢の、ウン・…の家に泊るようやてか。そうかァ・地元の署に協力を頼んで、ウン、ウン、すまんけど頼むわ。状況によっては密着もかましまへんさかい、ウン、駅から電話あったとき・ゆっか思ってたんやけど、こっちもカラッポにするわけにゆかんで……」

昭和54年○月○日午前九時、金沢の町はずれ・北陸鉄道の始発駅。野町駅に、同行四人はいた。

ホームには電車が一輌。「白山下」行がとまっているだけのガランとした駅だ。九時三分、路面電車のような電車は発車した。

「長さん、一輌だけってのはまずいですね・こちらを抽出するつもりで・わざと動いてるやり方やあらしまへんか」
「ま、いけるとこまでいかなしやあない。用心するからにや、何があるかも知れへん。ダミーでやることにするで。嶋ちゃんは、離れて先行たのむわ。わし、太トリになってひきつけるさかいな」

電車は何回か停車をくり返し、やがてこの人物を背景の中から浮き出させた。二人は気付く。

「あの銀ブチメガネのあれ……」
「うん・そう思ってたんや、あれはおなじみサンやで」
「あんた、大阪からずっとつけてきたん」
「知ってはったんか。さむうて・さむうて」
「ほんまにあきれてしまうわ」
「何処まで行きはりますねん」
「行きさきなんてあるかいな」
「そんなこと言わんと、ま、連れてっておくなはれ」

やがて白山下に着く・氷雨にとり囲まれて立ちつくす無人駅の三人。一人はどこへ？ 時間を少し戻してみよう。

「車掌さん、私はこういう者ですが、事情があって私の存在に気付かれにくないのです。車掌室にかくれさせて下さい」
「ごくろうさまです。どうぞ」
「白山下の駅はどうなってますか」
「無人駅でしてね、あたりに人家もなくて・バスが来て、一里歩温

泉行があるだけですよ」
「それじゃ駅に着く前に飛び降りたいのですが、かまいませんか」
「いいですよ。運転手にも駅の手前でスピードを落とすよう頼んどきましょう」

かくして無人駅白山下に着いたのは三人となった。バレていれば、バスの乗り降りで細工されることもないだろうが、バレていなければ用心の為、細工されるかも知れない。ならばバスに乗らぬ方の用心に姿をかくしておこう。バスに乗ったら、自分を知らぬ顔でのればよい。

バスが動きだした。三人が乗ってる。嶋田は全力で走った。ようやく乗る。息をきらしながら顔をそむけて、うしろへ坐ろうとした。

「おいもうバレてるのや。仲よう連れてってもらおー」

おかしげな格子にバス運転手は気になって仕方がない。通いなれた道を危く転落しそうになった程。

「いやあ、あん時は必死でしたよ。バスにおいてかれたらと思って、走った、走った」

「嶋ちゃんの顔付きは仲々のもんやったよ。こっちは、密着に切りかえてたんやけど、話でけへんかったやろが…」

「しかし夜中に電話をかけて、所在の確認をするというのは連中にはいい迷惑でしょうが、いいアイデアでしたね」

「嶋ちゃん、外部へはチャックやで。人権問題にされたらイチコロやさかいにな」

「あの赤ペンキというのは、どうなんですかねェ」

「あれは関電の嫌がらせとちゃうか。総会屋前でチンピラにしたんやろな。電話で不在を確かめてからやれば、見つかることもないしやね…」

「あれはなにか、旧約聖書の「過越」とかいう門につけた血のしるしみたいなのと逆ですね」

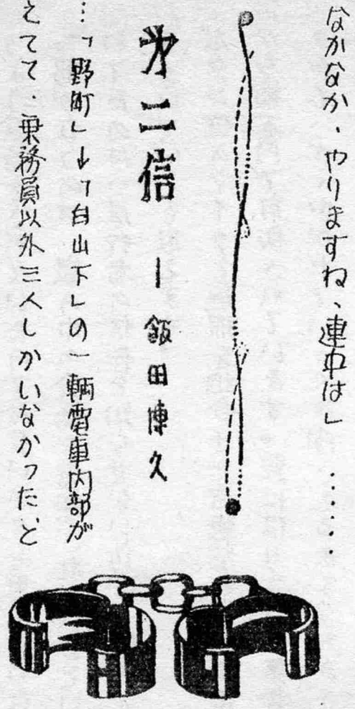
「なに、連中は、インド式にやっとんのとちゃうか。アリババと四〇人の盗賊式に、同じ印つけたらいいわい、と云うとるやろ」

「なかなか、やりますね、連中は」……

第二信

―飯田博久

……「野町」→「白山下」の一輌電車内部が見えて、乗務員以外三人しかいなかったとすると、と考えてみました。



まず、白山下の状況を分解してみると、三人のそこへいった手段は、電車という事実があります。駅は無人駅で、バスが一台待っていた。あたりに人家はない、ということ。終点が無人駅とすると、大体、単線となり、単線だと電車の間隔は数十分単位。しかも一輌となると利用客も少ない。

役（仮に、嶋ちゃん）が、大阪のおなじみの刑事であり、銀プチメガネとの言動から、チームであったことがわかるので、白山下における彼の存在は、偶然でない事となります。偶然でないとなると、それなりの理由があるわけで、ここでは尾行という事になります。尾行していたとなると、終点からひとつ手前（仮に）の駅の間において、彼の存在を見なかったという事が事実とすると、終点の白山下に彼が来ていた事実は、尾行の技術の中で解決されねばならなくなります。

同じ電車で行ったとすると、電車の外にでもぶらさがっていったとしか考えられず（荷物に化ける事も考えられますが）このような可能性を捨てるなら、役は別の交通手段を使って白山下に先行して車は返す、という可能性の成立する為には、電車の終点に、車で先に着けるだけの、スピードと距離が、道路上で可能かどうか、となります。電車の線路が直線的で、道路がうねり曲っていると、この可能性は低下します。この車で先行するということは、あらかじめパトカー等の手配をするとか、タクシーを確保しなければ失敗する確率が高いので、車で先行したとすると、あらかじめ行先を知っていることが、必要になります。もし終点ひとつ手前でわかったとすると、車の確保の問題からして未知の状態なので、車という手段は、ほとんどとれません。

二つ手前でわかったにしろ、同行の電車内で行先がわかった場合は、先行する車の確保が予見されないので、通常は、この方法をとれません。

この様に、白山下の事実から、その成立条件を消去してくると、乗った電車が一番電車でないかぎり、先発した電車に乗って白山下へ行っていたか、あるいは車で行っていたか、ということに限られてきます。いずれも役が、向井さん達が電車に乗る前に行き先を知っていた事が条件となります。白山下行の切符を買って長いこと待ってたとすると車で先行も可能となりますが、途中下車の可能性もあるので、先行した役は、目的地を知っていなければ、不確実性にかけた事になりますので、これも可能性少なくなります。

となると、役らはいつ向井さん達の行こうとする目的地を知ったのか？という事になります。

迫った家で、おにぎりを作って貰ったということを考えると、この時、話がされたか、前日、「加賀白山の冬景色みにいこ」という会話を聞かれたか、という事になります。

これを証明するのが、彼が隠れていたという事実で、一里野温泉行バスが、「高い雨宿りや」というハプニングによってもたらされたことを考えると、隠れていた役には予想外の出来事となり、全力疾走で現われたことが説明されます。

つまり、これからは逆に、何甘さん達は、会話の中で「白山下からは歩く」というような話をされていたのではないか？と思えるわけです。ゾッとするのは、また脱が立つのは、家の中の会話を盗聴されているという事！

隠れていたのは、尾行者の存在を知らせない所で、何をするかを知ろうとした（尾行をまいて）とも思えます。

ボタン位のマイクと無線を組合せた盗聴器を、産業視聴覚機とか称して、八千円から数万円で市販されています。家にはりつける集音器兼用のものだと、ささやき声も、さゝやかれている人が内こえるような大きさで聞こえます。鍵穴など家内の空気とつながっているものは、もっとも聞きやすいもので、テグスをつけておいて、誰か来たらパッとひっぱってはずし、といった事もやります。

防聴には手法があります。無線式の盗聴器は、これを発見する機械もあって、高いけど市販されていたと思いますへアメリカ製〉

マイクの性質から、高音をよくひろうので、高い音を流されると、邪魔されてよく聞こえなくなります。中には、人の声（一五〇〇ヘルツ）あたりに特性を合せ、他はカットする明聴装置もついているので、会話のテープかなにかで一五〇〇ヘルツ前後の音を流します、と明聴装置も駄目です。　・・・・・

あさひまちから

この号は、はじめ七月末に出すつもりで最下だけをまずつくって、それがだんだんふくれ、八月二〇日すぎに出せるようになったとたん、忙しくなって、またまたのおくれ。発行日　正しくは九月一日です

Ω　8月11日～14日、10人ばかりでRさんと海びにいってきた。カマドでご飯を炊き、川で泳ぎ、魚をとったり、唐キビを抜いたり、暴力論ノートの感想会や暴力トレーニングでたのしんだりして帰ってきたら、早速電話。受話器をとるとすぐきれて、「例の所在確認らしかった。　Ω　前号で詩を投稿したせいか、まで常時びっしり監視されてるように思って「大へんですね」などと云われると何び困ってしまう。（詩の内容はみな事実だが）、日常はそれほどでなく、ちらほらぐらい。もっとも、さっぱり気にしないうかつさ、のんびりさがあるかもしれないが。　Ω　それにしてもぼくらは何もわるいことをしてるわけじゃなし、盗聴、尾行承知？うしろぐらいことは一つもない。　Ω　大衆運動である以上、秘密はいらないし、むしろ敵のうごきをも自分らの力にしなければ…というのがぼくの考えだ。　Ω　それにしても飯田さんの手紙にはびっくり。ぼくの一篇の詩の裏側を、こんなに迫真的に描きだす、その「想像力」ー「創造力」には、たゞおどろくばかり。そして何よりぼくが教わったのは、「敵さんの動きを先きに読みとって、闘う」という視点である。　Ω「想像力ー創造力こそは、闘いに不可欠の武器である」ということばを、このように如実に、具体的に示されたことはない。　Ω　イオムで読んだということで、獄中へ「絵ハガキ」ででもシャバの風を送って下さる方があると、大へんうれしい。宛先、飯田博久（東京都葛飾区小菅一ー四ー一）

イオムの購読申込みは、50円切手貼付し、自分宛宛名を記入した送付用封筒（6～10枚で約半年分）をお送り下さい。できれば簡単な自己紹介、何で知ったか、など書き添えて。また、時々感想を送って下さるとうれしい。

大阪
中之島川遠景